

無尽燈 (女性の使命)

話のいとぐち

維摩經の中にこんなことが説いてある。

在家の大菩薩である維摩居士はあらゆる方便を以て多くの人を救っている。その維摩が病気になる。病気になればなつて同じ衆生をして悟を得しめている。

時に彼は自ら念うには「我は今病床にある。世尊の大慈悲は愍れみを垂れて問病の使をつかわして下さるであろう」と。世尊は其意を知り、まず第一に舍利弗に告げて「汝、維摩詰が所に病氣見舞に行け」と言われるが、舍利弗は「私は昔、林の中の静な樹下に安坐していますと、維摩が来て叱つて言うには『汝は樹下に閑居するを安坐と思つているが、万境即空とわかれば、山に入る必要もなければ世の避くべくもない。もし万法に対する執着がとれないならば、山林の中に入ったところで散乱を離れることは出来まい。つまり汝は不断煩惱得涅槃がわかつていないのだ』とさんざん叱られましたから、とても彼に詣つて病を問うの任ではありません。」とおことわりする。こうして次つぎに十大弟子に及ぶが、皆彼に呵しかられたことを告げておことわりする。これが弟子品第三である。

次に菩薩品第四に、四人の菩薩、即ち一に弥勒、二には光嚴、三には持世、四には善徳と、問疾使を仰せつかるが、これも皆おことわりする。今無尽燈という極めて有難い言葉の出るのが第三の持世菩薩のところである。

悪魔と智慧

仏は持世菩薩に告げていわれる。「汝、維摩の所に詣り病を問え」。すると持世は「世尊よ、私はとてもその任に堪えることは出来ません。そのわけは……。」と語るのが次の如くである。

持世菩薩はある時静かな室に住して仏道を修行していた。その時天魔波旬が万二千の天女を従へ、しかも魔王の姿をかくして帝釈天の姿となつて、美しい音楽を奏しながら来訪し、その眷族と共に恭しく礼拝合掌した。その時、持世には魔王だと見破る力がなくて、帝釈天だと思い、之に語つていうには「帝釈天よ善く来られた。帝釈よ。五欲の世界は無常である。これに執着してはならない。五欲の無常を觀じて、善本を求め、身と命と財を捨てて道を修する者は、必ず無極の身と、永遠の命と、無尽の財を得て、たとい天地は焼け失すとも失せず、劫数つきるとも尽きないであろう。これを豎法を修すというのである」と説法した。

すると彼は「菩薩よ、有難うございます、私は御法を聞かして頂いた御礼に、この万二千の天女をご供養したいと存じます。どうかお側においてお掃除にでも御使い下さい。」といった。持世はおどろいて「帝釈天よ。我は出家修行の身である。天女の如きは「非法之物」である。何でかくも仏道の邪魔ものを私に贈らうとするのであるか。」と言った。

ところが言いおはらぬ間に、そこに維摩が現われていた。維摩居士は、持世を呵かしているには、「持世！これは帝釈天ではなくて、魔王波旬である。汝は天魔来つて汝の禅心を乱さんとするのがわからぬか！」と大喝した。彼は叱られた。何を叱られたか、彼の修堅法の説法が間違っていたのではない。彼は魔王波旬の正体を見破る力なく、魔につかれてそれを覚らず、その詭術に翻弄せられて説法し、その説法につけこんで更に悪魔は善に従うまねをして、持世の辞心を乱さんとする、彼のこの智慧のなさを叱られたのである。

悪魔が悪魔の相ならば誰でもかゝりはしない。然し、悪魔は装ふ。頭を下げてつけ入つて来る時、それに弄せられる。維摩は見破つた。彼は魔王に言った。「是の天女は私が貰い受けよう。持世は辞退したが、私だつたら受けられる。さあ頂こう」それを聞くと魔王は驚きおそれた。そこで形をかくして去ろうとするが、どんなに神通力を使つても形をかくすことも去ることも出来ない。智慧の前には悪魔は無力である。時に空中に、声があつて聞える。

「波旬、女を維摩に与えたならば去ることが出来るであらう。」
そこで魔は畏れをなし、考えていたが天女たちを維摩居士に与えた。

維摩の説法―法楽

持世が『此非法之物』といった天女たちは、大菩薩維摩にとつては非法之物ではなくて、説法の対象であつた。女がつまらぬものと見えたのは持世の智慧では包みきれなかつたのである。

維摩は彼女らに説法をはじめた。

「魔は汝等を我に与えた。今君たちは無上菩提心を発さなければならぬ。」
天女らの為に法を説いて、菩提心を発さしめてまた言った。

「君たちはすでに道意をおこした。世には法楽というものがある。法楽こそ真の樂しみである。法楽をたのしんで、五欲の樂しみを樂しむべきではない。」

これを聞いた天女たちはその法楽とは何のことであるかを問うた。そこで維摩は、
まず、

- 一、常に仏を信ずるを樂しみ
- 二、法を聞かんとするを樂しみ
- 三、衆を供養するを樂しむ

と仏法僧の三宝に帰依することの樂しみを教える。法楽とは帰依三宝のことである。

次には

- 一、五欲を離るるを樂しみ
- 二、五陰は怨賊の如しと觀ずるを樂しみ
- 三、四大は毒蛇の如しと觀ずるを樂しみ

四、内入（内入とは内身の十二処。十二処とは眼耳鼻舌身意の六処と、色声香味触法の六処、つまり六根六境のこと）は空聚（空村に同じ）の如しと觀ずるを樂しむ。

以上の四句は厭惡門の樂しみである。

次に

- 一、随つて道意を護るを楽しむ
 - 二、衆生を繞益するを楽しむ
 - 三、師を敬養するを楽しむ
 - 四、広く布施を行ずるを楽しむ
 - 五、堅く持戒するを楽しむ
 - 六、忍辱柔和を楽しむ
 - 七、勤めて善根を集むるを楽しむ
 - 八、禪定にして乱れざるを楽しむ
 - 九、離垢の明慧を楽しむ
 - 十、菩提心を広むるを楽しむ
- と十句を以て修善門の法樂を教え、次にいわゆる善惡雜門について、
- 一、衆魔を降伏するを楽しむ
 - 二、諸の煩惱を斷ずるを楽しむ
 - 三、仏国土を淨むるを楽しむ
 - 四、相好を成就するが故に諸の功德を修するを楽しむ
 - 五、道場を莊嚴するを楽しむ
 - 六、深法を聞いて畏れざるを楽しむ
 - 七、解脱門（空無相無作の三、この三門によつて縛をとくから脱という）を楽しむて非時（二乗の人は三脱門に入つてもその極をつくさずして途中で涅槃をとる、これを非時という）を楽しむ
- まない、
- 八、同学に近づくを楽しむ
 - 九、非同学の中に於いても障りなきを楽しむ
 - 十、悪知識を將護するを楽しむ
 - 十一、善知識に親近するを楽しむ
 - 十二、心に清淨（実相実淨の法）を喜ぶを楽しむ
 - 十三、無量の道品之法を修するを楽しむ。
- これを菩薩の法樂というのであると、説いて聞かせた。

無尽燈

ここに於いて天魔波旬は、天女らに告げて言うには
「私は汝らをつれて天官に帰りたくなつた」
天女たちは、天の魔王にむかつて
「あなたは、私たちをこの居士に与えたではありませんか。私たちは説法を聞いて法樂を得ることが出来ました。我等は甚はななだ樂しんでおります。もう再び五欲の樂しみを得ようとは思いません。」
と言つた。

天魔は維摩に向かつて、

「居士よ、居士はこの女をお捨て下さい、一切の所有を人に施す者が菩薩であると聞いてをります。」

悪魔もまた人に向つては正法を強いる。維摩は言う

「我已捨矣 わしは前から捨てている。何も所有してはおらぬ。本説法のためを受けたのみである。すでに説法をおわたつた、惜しむところはない。一切衆生をして法願具足せしめるのが菩薩の常法である。」と。

すると天女らは悲しんで問うた。

「私どもは、どうして魔の宮殿に止まることが出来ましょう。」

その時維摩は彼女らに言った。

「諸姉よ。一つの法門がある。無尽燈と名づける、これを尊ばねばならない。無尽燈とは、ここに一燈がある。この一燈を次ぎつぎに移して百千燈を燃すことである。そうすればくらき者が皆明るくなり、光明は終に尽きる時がない。是の如く諸姉よ、一人の菩薩百千の衆生を開導して無上正真道の心を発さしめ、その道意に於いて滅尽せず、所説の法に於いて自ら一切の善法を増益する。是を無尽燈と名ける。君たちは魔宮に住むと雖も、この無尽燈を以て無数の天子天女をして無上菩提心を発さしめることが出来れば、仏恩を報ずることとなり、又大いに一切衆生を利益することが出来るであろう。」

天女たちは歡喜して頭面を以て維摩居士の足を礼拝し、魔に随つて天宮に還つて行つた。

かくの如く持世は世尊に語り、

「維摩には如是の自在神力智慧弁才が有りますが故に問疾の使に行く資格はありません」と断つた。

昔、真言天台等のいわゆる聖道門の人たちは、女人は仏法の非器だと言い、「大蛇を見るも女人を見るな」とて、女人禁制の山を造り、そこに道場を開き、男性のみの仏道修行をした。皆、天女を恐れて「此非法之物」と言い、かえつて悪魔を見破ることの出来なかつた持世菩薩の眷族である。悪魔を見破る智慧の持主は同時に天女を恐れず、これを導いて「諸姉」とよぶ智慧の人であつた。つまりぬというは小さき智慧袋、智慧がないからものを殺す、智慧が小さいからものはみ出るのである。

女人でも悪人でも邪魔になるのは、女人に罪があるのではない、男子の心に弱いものがあるのだ。叡山の宗教を根こそぎ疑つた親鸞聖人は男性本位の山を下られた。そして吉水において本願大悲智慧真実功德大宝海たる弥陀他力に帰せられた。一切衆生よと呼びかけ、悪人よと呼びかけ、女人成仏と誓ひたもう広大なる大慈悲智慧を体得せられた。今この維摩経の説を、本当に大地の事実たらしめたのは誰だ。

人の世に住む女性たち、それは大方悪魔の中に住んでいる。時には夫さへ、親さへ、子さへ悪魔であるかもしれない。その時、同朋よ、仏法を聞け、そして信心を得よ、今の無上菩提心とは、自然にあなたに与えられて、あなたは念仏道の有難き尊さを知つて、法味樂にこした喜びの無いことを知るであろう。

かくして不滅の燈となった女性が、その謙虚なる生活態度と明るい喜びに満ちた心を以てこの六字の靈火を子供につけ、夫につけ、兄弟姉妹につけ、隣人につけ、かくして連續無窮に聖火が点ぜられてゆくならば、これが即ち無尽燈である。そしてそれは今我等の御同朋によつて展開されている事実である。私は机上一本の手紙を取り出して読む。

「前略……此度の聖会には妹と弟と二人が参加させて頂きました。五日朝ほんとうに喜んで帰宅してくれました。帰ると妹は直ちに手をつけて御礼を申してくれました。弟は泣いて今迄の自分は悪かった。姉さんがお念仏申そう申そうという心がはじめて分つて来た。ほんとうに相すまない僕でした、と言つてお礼を申してくれました。三人で涙の中に挨拶を交した様な次第でございました。誠に御念仏の姉妹に御育て下さいましたことを厚く厚く御礼申し上げます。里に帰れば母へも大変泣いて御礼やおわびを申したとのことで御座います。五日の夜は母と弟と私と三人で夜の更けるのも忘れて御讃嘆させて頂きました。親子揃つてご讃嘆させて頂く幸福な日がこんなにも早く来ようとは思いませんでした。先生が御念仏を相続なさいますと三十一一年なのによつと今我が家に御念仏の燈を点して頂きました。母も有難い母になつてくれました。母が申します、『私もこの年になつてお前のおかげでこの有難い御法を聞かせて頂く事が出来、その上末の子まで御念仏の子にして頂くことが出来て何という幸せな身の上だろう』と、御讃嘆の度に早や涙を流している母でございませぬ。これも皆み仏様の御念力より外何ものもございませぬ。母は常に、『これも皆○の奥様のおかげで先生にお会いすることが出来たのだから』と申します。誠に御念仏申す者のみに感ぜられる幸でございませぬ。いよいよ両眼を閉じるまで聞法精進させて頂きます。一日の仕事を終えて、夜一人静かに光明を頂きます時、現に先生の有難い御講演を拝聴している様な氣持になり、我知らず、先生、誠に有難うございませぬ、よく分らせて頂きますと、口からもれることがございます。御慈悲に満ちたお声が静かに静かに私に聞える様でございませぬ。何度頂いても頂いても頂く度に涙が出て文字も見えなくなる時がしばしばでございませぬ……以下略」

女性よ念仏して往け、如何なるところへも。

悪魔の翻弄物となるのか、仏の使となるのか、

自ら波旬の子となつて人の一生を暗に葬るか、

自ら無尽燈となつて尊き使命に生きぬるか。

煩惱は油、六字は聖火、

如何に罪業重き身も、苦悩の多い女性も

一度六字の無尽燈が点ぜられて、南無六字の行者となれば

宿業によつて如何なる処に身をおくとも

不滅の靈火は人間のありのまゝを真に生かしたまい、

自他共に救はれて、真の樂しみが何であるかを知るのであらう。